



陽菜子さんの容易なる越境

作：相羽裕司（あいばゆうじ）
イラスト：霧生実奈（きりゆうみな）

世界史で習う「ベルリンの壁崩壊」^{かべほうかい}ってあるじゃないですか。出来事が起こった背景とか、その歴史的、社会的意味とかにはそんなに興味があるわけじゃないのだけれど、何故だろう、子供の頃から「二十世紀を振り返る！」みたいなテレビの特番で何度も見てきた、あの人々が壁をよじ登って情念^{じょうねん}を解放^{かいほう}している映像は、私にとってはひどく心に残るもので、成長していく過程^{かてい}でしばしば立ち止まってはそのイメージに想いを馳^はせて、色々考え込んでしまうことが私にはよくあった。上手く言葉に出来ないのだけど、たぶん、何かと何かを隔^{へだ}てていた境界^{きょうがい}を乗り越えるという行為^{こうい}が、強く私の心を惹きつけるのだと思う。私が繰^くり返^{かえ}し自問^{じもん}した想念^{そうねん}はおおまかにはこうだ。

1 / 壁を越えて向こう側に渡ろうとする人の背中には、ひどく勇気づけられる。

2 / けどもし自分の大事な人が壁の向こう側に行ってしまうとしたら、それはとても切ない。

境界を越えていく勇氣ある人の背中にワクワクを感じてしまう。これはもうどうしようもないことだと思う。だって境界の向こうには新しい世界が広がっているのだもの。自分が行きたいと願う新しい世界に向かって壁を越えていく。この高貴^{こうき}で高潔^{こうけつ}な心に誰が胸のときめきを押さえることが出来る^{でき}だろう。

だけど、一方で、大事な人が遠くに行ってしまうのはイヤ。これもまたどうしても抑^{おさ}えることのできない感情だからこの命題^{めいだい}は難しいのだと思う。でもわりと普通でしょう？ 想像でしかないけれど、皆が皆、壁の「向こう側」に大事なモノがあるわけじゃないと思うの。壁の「こちら側」に大事なモノが残っている人も、きっと沢山いるはずで。

そこまで想いをめぐらすと、そんな大事なモノを置いて、壁の向こう側に行こうとする人の気持ち
ちが分からなくなってくる。

壁があるなら超えて行って、私をワクワクさせて欲しいけど、だけど私から遠くに行ってしまうのはやめて欲しい。そんな相反する気持ちを同時に抱えてしまうとなんだか途方にくれてしまつて、ベルリンの壁も万里の長城も、ありとあらゆる壁という壁がひどく高くて重苦しいものを感じられてきて、ちょっと関わることすらおっくうな、そんなネガティブなものに感じられてきてしまつたりもして。

大事なその人が渡りたがっているとしたら、本当に、私はどうすればいいのだろう。一緒に壁をよじ登ればいいのだろうか。それとも壁を登るのはやめたとその人に懇願すればいいのだろうか。

答えの出せない私は、今日も両膝を抱え込ん

で眠りにつきます。



頭に何か柔らかいモノがぶつかった衝撃でキコは目を覚ました。

まだ暗い自室の布団の中、枕元の携帯をたぐり寄せディスプレイの時刻を確認すると、目覚ましのアラームをセットしておいた時間にはまだ十五分ほど早い時間だった。

一体何が？ 三分の一ほど目覚醒していない意識のまま手の届く範囲をまさぐると、やがて柔らかい感触が手に触れる。

携帯をスライドさせてメインディスプレイの薄明かりで確認。白熊だった。

しょうがないのでここで一句詠んでみる。

夢の後 現の世には 白熊が

ダメだ。さすがにまだ頭が働かなくて切れがある句が出てこない。そもそも、寝起きで一発目の題材が「白熊」というのが難易度が高い。

いや、「白熊」という一般名詞で呼ぶよりも、「シロクマ」という商品名で呼んだ方がいいのかな。最近大流行の癒し系白熊、「シロクマ」のぬいぐるみ(中)である。

もー、陽菜子さんったら。

何故かシロクマ本体の名称よりもそれを贈ってくれた親友の名前を思い浮かべながら、キコは寝起きから苦笑いするはめになる。

というか集め過ぎ。そしてくれ過ぎなんだよ、陽菜子さん。

趣味の古典が並べられたカラーボックスの上に、所狭しと積まれたシロクマを寝たまま見上げていると、徐々に意識が覚醒してくる。これだけ積まれてたら、そりやバランスを崩して落ちます

るよなんて思いながら、ここで起きちゃうべきだよねと、布団から上半身だけ起こして、落ちてきたシロクマを愛でる。陽菜子さんとの早朝のデートは日課だったりする。陽菜子さんからメールが来る前に、陽菜子さんから贈られたシロクマに起こされるというのも、まあ、アリって言えばアリだろう。



リビングに設置したベッドでまだ眠っているお母さんを起こさないように、夜遅くまでパソコンに向かって仕事して、今またお母さんの夜の介助のためにお母さんのベッド脇に布団を敷いて寝ている兄さんを起こさないように、そして日中会社で一生懸命働いてくれる向いの部屋のお父さんを起こさないように、キコはそつと玄関のドアを開ける。

「行ってきます」と心の中でだけつぶやいて、音が鳴らないように慎重にドアを閉める。

さあ、薄暗がりの朝の町へ出よう。マンションの九階から生まれ育った町の一日の黎明を見下ろしてまだ冷たい空気を鼻で吸い込むと、丁度、マナーモードに設定していた携帯が振動音を發した。陽菜子さんからのメールだ。

——今から行くよん。

短い出立報告のメール。いつもの陽菜子さんのメールだ。



ゆるやかで大きな川にかかる地元では由緒ある大橋の所までやって来て、いつもの待ち合わせ場所である橋の手前の休憩スペースのベンチの

上に座って所在なくペン回しの要領で携帯をくると片手で回していると、やがて橋を渡ってくる陽菜子さんの姿が見えてきた。

朝から元気な陽菜子さんは橋の途中から駆け足でスピードアップしてやってくる。そこに走り高跳びのバーが設置してあったら、軽々と飛んでみせるんじゃないの？ というくらいの期待感を持たせる軽やかな走りで、その姿は朝から躍動感に満ちている。やがて休憩スペースまでの最後の1メートル辺りで本当にピョンと飛び跳ねたのにはビックリしたけれど、そこに陸上競技で使うハードルも高跳びのバーもあるわけではないので、陽菜子さんは無難にキコの鼻先に着地する。指二本の独自の敬礼のポーズを決めちやったりしながら本日の第一声。

「キコちゃんおはよう！ 今日遊ぼう！」
だって。



キコのマンションがある橋のこちら側に向かう形で陽菜子さんと肩を並べて歩く。

季節は四月も半ばを過ぎた春。陽菜子さんの服装も春仕様になっていて、白いミニスカートにピンクのTシャツ。その上にこれまた白いレザージャケットを羽織っているというスタイルだ。普通に見ると白が強いこのスタイルも、存在そのものが太陽の白光のような陽菜子さんにはよく似合う。スカートからスラリと出ている足がヌーディー過ぎずにほどよく清楚にセクシーな感じだ。今更しみじみと思うことでもないけれど、キコのこの親友は大きい瞳に美肌を携えていてナチュラルにキレイで可愛く、かつ適度にオシャレで、女の子としては憧れたくなる外見をしている。肩にかかるくらいで無秩序にバラした髪もちよっと茶色に染めてるしね。キコ達の通う高校

は私服の高校なので、おそらくはこの服装が今日の陽菜子さんの学校でのスタイルにもなるのだろう。一方キコの方は陽菜子さんとは逆に黒のスカートにこれまた黒い水玉のカットソー。上から無造作にジージャンを羽織っているというスタイルだ。黒のテロテロスカートは程よい女らしさがあつて着回しやすいからキコは気に入っている。これでも陽菜子さんと親睦を深めるうちにオシャレには気を使うようになってきた方だ。小さい頃は、オシャレより「本」って感じの子どもだったから。古典が好きだからってわけじゃないけど、髪はわりとツヤが自慢で長いのを後ろで結びにしている。ほどくと平安貴族みたいだねって言われるのが微妙に誇らしかったりもして。

「この百円玉は弾丸」

朝の心地よい空気を胸に吸い込みながら並んで歩いていると、親指と人差し指に百円玉を挟みながら、陽菜子さんが右手で銃を作った。

「標的ひょうてきはもちろん白熊。ズドンと一撃いちげきでしとめ
ちやうの」

「それは強力きやうりよく。でも私的わたしてきには極力きよくりよく傷つけな
いでやって欲しいな。ケガしてるシロックマじゃ、
ハラハラしちゃって癒なごされないもん」

「うん、じゃあ麻醉銃ますいじゆうという設定にする」

「そんないい加減な会話をしながらキコのマン
ションの部屋から眺望ちやうぼうできる商店街を抜け、最
近訪れるのが日課にっかとなりつつあるゲームセンタ
ーという名の狩猟場しゆりやうばに向かう。目指すは、クレ
ンゲームのシロックマ（ぬいぐるみ）一体だ。

「傷つけずに仕留しとめるわ。でもってそいつを売っ
て資本金しほんきんにして白熊の拡大再生産かくだいさいせいさん。世界中の白熊
が私のもとに集まったらどうしよう」

「環境保護団体かんきやうほごだんたいに訴うったえられないように気をつ
けてね」

「そんなくだらない会話をしながら歩く。キコは、
この時間が結構好きだ。」



二十四時間開あいてるゲームセンターに早朝か
ら女の子二人って、なんだか訪れてる二人は
常習じやうしゆうの不良みたいに思われるかも知れないけ
れど、長いグレイゾーンを想定するならだいたい白
よりの活動なんじゃないかと思ってキコは毎日
来続けている。危ない薬に手を出すとか、アルコ
ールを摂取せつしゆしちゃうとかに比べたらとつても白
いんじゃないだろうか。白熊だけに。

「そんなうすら寒いことをキコが考えてるうち
に、陽菜子さんはとつとシロックマコーナーに
向かっちゃって、シロックマの品定めしなさだをしている。
ゲームはいわゆるクレンゲームなので、どのシ
ロックマが取りやすいかとか、そういうのをガラ
スに顔を近づけて分析している。」

「あ、キコちゃん、今日は昨日まで無かった『ま

ったり』があるよ」

との陽菜子さんの報告。

「まったり」というのはシロツクマの表情のことで、いろいろ、「にっこり」とか「ぼんやり」とか種類がある。それぞれ出荷数しゅつかずうが違ちがうらしく、

レア度とか、シロツクマー（シロツクマファンの総称そうしやう）の間では色々あるらしい。陽菜子さんから仕入れた知識によると、「まったり」はレア度高し。ちなみに今日キコの頭の上に落ちてきたのは「ぼんやり」だ。そう思うとシロツクマが勝手かたてにカラーボックスの上を歩いていて不注意ふちゆういで落ちてきたみたいだけど。

「陽菜子ちゃんおはよう」

シロツクマを凝視ぎやうししている陽菜子さんに後ろから声がかかる。

「あ、島田しまださん。おはようございます」

声をかけてきたのはほぼこの時間に日参にっさんしてるだけに、もはや顔なじみにもなろうという、早

朝シフトの店員さんの島田さんだ。ちなみに陽菜

子さんはきちんと挨拶あいさつができる礼儀正しい女子高生。キコもならって「おはようございます」と頭を下げる。

「『まったり』、狙ねらっちゃうの？」

訊ねる島田さんに向かってこくりと頷うなずく陽菜子さん。

「配置は島田さんが？」

「うん、夜中に何人かチャレンジしてた人がいて崩れちゃったけど、ついさっき配置し直した所」

「それじゃあこれはフェアなゲームというわけですね」

キコも陽菜子さんにつき合っているうちに知ったことなのだけど、ゲームセンターでも熟練で誠実な店員さんになると、クレインゲームの中のぬいぐるみの配置にも高度さとフェアさがないじみ出てくるのだそうだ。レアなぬいぐるみを、難易度が高い位置には置くのだけれど、決して取れ

ない位置には置かない。そういった一種の美学が働くのだそうだ。それは難しくても序盤じよばんの伏線や推理材料からちゃんと犯人が割り出せるようになっていいるフェアな本格ミステリのようなもので、そういう良質なシロクマキャッチャーにこそ挑いどみ甲斐がいがある、と、これが陽菜子さんの弁べんである。

そして陽菜子さんは「読者への挑戦」付つきのミステリの犯人をちゃんと推理して当てちゃうような人だし、新種のパズル型ゲームをやってもその法則性を短時間に分析して高得点をたたき出しちゃうような人なのである。ただし、ミステリもゲームも陽菜子さんが「面白い」と思ったものに限ってだけだ。

そしてキコの部屋に高く積みまれた陽菜子さんから貰ったシロクマのぬいぐるみを鑑かんみるに、最近の陽菜子さんは猛烈もうれつにシロクマを面白いと思ってる。今までの経験則けいけんそくから陽菜子さん有利

かな。キコがそう思った時、陽菜子さんがキャッチャーに百円玉を入れた。

「任務了解にんむりようかい。これより『まったり』顔の白熊の捕獲ほかくさくせん作戦に入ります」

◇

笑顔の陽菜子さんと肩を並べてゲームセンターを出る。普通に平日はこれから学校に行く身の二人なので、いつも長居ながいはしない。シンプルに勝負して、結果かかに関わらずすみやかに退散する。まあ、今日の場合、結局「まったり」シロクマはしっかりとゲットした陽菜子さんな訳ですが。

ちようどヒマな時間帯なのか、島田さんも入り口まで出てきて笑顔で手を振っている。こういう時、別に店員さんはお客さんから商品を守ってケチケチしてるわけじゃないんだと思う。自分の創つくった自信作の謎をさわやかに読者に解いて貰

えたミステリ作家の清々しきというか。もつとも、島田さんにいたってはともかくお客さんを喜ばすことに一番の生き甲斐を感じてるようなふしもある。

「ごめんね、今日の『まったり』はちよつと使うからキコちゃんにはあげられないわ」

首根っこを掴んで持ち歩いてもいいようなものなんだけど、まるで赤ちゃんでも抱くように両手でやさしく「まったり」シロクマを抱えながら陽菜子さんが言った。

「ううん、いいよ。私の部屋、だいぶ、つていうかかなりシロクマに占領されつつあるから、そんなにシロクマに対してどん欲じゃないよ」

「そう？ それはそれで寂しい気もするんだけど」

陽菜子さんがキュートな微笑みを浮かべる。まあ、はたから見れば本当に些細なことなのかもしれないけれど、親友が一勝負して価値あるものを

手に入れた朝は気持ちがいい。春の風は気持ちいいし、なんだか見慣れた商店街の町並みも今日は活気ある一日になりそうな予感を感じさせた。こんな気持ちを、これからも繰り返してわっていったらいいのに。キコはそんなことを思った。

◇

大橋の手前まで戻ってきた二人だけれど、すぐにハイさようならというのも味気ないので、橋の欄干に寄りかかりながら少々の談笑を楽しんだ。「それでさ、キコちゃん」

「いよいよ朝の時間も押してきてそろそろ解散かという時になって陽菜子さんが切り出した。

「前に頼んでた話だけど、お兄さんの方、アポ取れた？」

「うん……」

キコはちよつとだけ顔を伏せかけたが、すぐに誤魔化ごまかすように視線を橋の下を流れる川に向けながら答えた。

「兄さん半分夜型よるがただから、お父さんとお母さんが眠ってからの夜十時くらいが都合つごうがいいって。その時間ならいつでもいいって言った。陽菜子さんはどう？」

「うん、それでいいよ。紀之先輩のりゆきせんぱいに会うのも三年ぶりくらいかなあ。まさかこんな用件ようけんで会うことになるなんてね」

そういつて陽菜子さんは笑った。

「でも……」

「うん？」

そこでキコは少し言葉をつまらせる。

「ううん。上手く言えないんだけど、やっぱり、なんか寂しいなあ」

そんなキコに向かって陽菜子さんはパンと軽くキコの肩を叩いた。

「大丈夫、何も寂しいことなんかないよ！」

そう言つて陽菜子さんはきびすを返す。

「それじゃ、また学校でね。ヤバ！ そろそろ駆け足ちしこくじゃないと遅刻ちこくペースだよ！」

橋を軽やかに向こう岸に向かって駆けていく

陽菜子さん。その足取りは面白いくらい軽かった

けれど、見ていたキコはなんだか空虚くうきよな気持ち

胸に過ぎよった。学校ですぐ会えるのに、なんだか

離れていく陽菜子さんが無性に愛あいしくて。町の地

名的には、橋のこちら側が一丁目、向こう側が二

丁目、それだけのことなのに、なんだかその一と

二の差がとっても大きいように感じられたりし

て。



少し、キコの家族のことを説明しておいた方がいいかもしれない。キコの家族はキコに加えて父、

母、そして七つ離れた兄の四人家族で、それなりの波乱を含みつつも大ざっぱには順風満帆にやっってきた仲良し家族だった。しかし明けない夜は無いというように、暮れない昼も無かったというか、今から2年前、キコが高校一年の時に、母親が倒れて半身が麻痺してしまったという凶事に見まわれることになる。具体的にどうして倒れたとか、倒れた当時どんな様子だったかとかは今でも思い出すだけで胸が苦しくなるのでキコは思えないことにしているのだけれど、ここで陽菜子さん絡みでこの事態が関係してくるのは、お母さんが倒れたことによつて、それまで研究者の道を目指して大学院のマスターコースで勉強していた紀之兄さんが、日中の介護のために院をやめてパソコンを使って在宅で仕事をする、いわゆるSOHO（ソーホー）に転身したことである。定年までまだ間がある会社員のお父さんが会社を辞めるのは財政上生産的とは言えなかったし、

まだ高校一年生だったキコに何ができるわけでもなかったため、兄さんの決断はキコの家庭にとつてどうしても必要な選択だったと言える。兄さんも元が明朗な人だから、今では比較的快活として家事に介護に仕事に（主にはパソコンを使ってトレーダーをやっているのだけ）と活動して家庭を守ってくれているけれど、そういう生き方を選ぶ決断を下した当時は、一体どれだけの覚悟と決意と、そして優しさが兄さんの心に溢れていたのだろうかと今でもキコは思う。

当時も今も古典が好きで国語の先生を目指しているキコは、分野は違うけれど（兄さんは理系だ）同じアカデミック繋がりで、常に優秀な成績を収めながら研究者を目指して邁進していた兄さんを尊敬もしていたし、何より大好きだった。それがこんなことになっちゃって。それから兄さんは180度方向を転身してビジネスとか、それこそ投資のこととかを勉強しながら日夜頑張っ

て、今では家庭のことをやりながらも十分な収入を家計にもたらしてくれているけれど、キコはなんだか昔よりも兄さんが遠くに行ってしまったような言いような寂しさを感じるようになっていた。古典が好きで、それを教えるお仕事でお給料が貰えたら素晴らしいだろうと考えていたキコと、自分の好きな研究で生活して行けたらと頑張ってた兄さんは確かに同じ場所にいたような気がするのだけれど、何て言うか、今の、家にいながらお金の作業で頑張ってる兄さんのいる場所は、キコとは何かで隔てられた場所のような気がしてしまうのだ。ベルリンの壁とまで大げさなものじゃないかもしれないけれど、あの日以来の兄さんの生きる道とキコの生きる道とは壁で隔てられてしまったような気がする。というか、兄さんが、渡って行ってしまったのだ、家族のために。

そして今度は陽菜子さんが向こう側に渡ろう

としている。

中学生の時以来、学校の先生になるために一緒にの大学に行こうとキコと約束していた陽菜子さんが、高校三年のこの春、進路希望調査に「独立起業」と書いて学校に提出したのだ。

◇

「それはクワドラントの壁だよ」

翌日の学校で、兄さんに対してもやもやとした気持ちを抱いているという話を陽菜子さんに吐露したキコは、陽菜子さんからそんな回答を得た。とりあえず、ここでは陽菜子さんに対しても同じような気持ちを抱き始めていることは本人の前で伏せたままだけだ。

「クワドラント？」

属性として英語よりもまずは日本語といった

趣のキコは、聞き慣れない横文字の単語を尋ね

返した。

「日本語に訳すと『四分円』よんぶんえんってとこだけどね。

今、ここでの使い方ではビジネス用語での意味。

人には金銭的きんせんてきに主に四つの生き方があって、それ

ぞれの生き方では色々違ってくるって話かな。あ

たかもそこに四つを区分する壁があるかのよう

に……ってこの話、長くなるけど聞く？」

「昼休みが終わるまでに終わりそうなら」

学食のAランチのチンジャオロースのピーマ

ンを箸はしで口に運びながらキコが答える。学食のお

盆を校庭が見晴らせる外のベランダ的スペース

に持ち込んで昼食を二人で取っている所である。

やはり春なので、外の風に触れながらの食事の方

が気分がいい。制服が無いことも含めて、こうい

うこともできる辺り、キコの通う高校は校風が自

由だ。

「ちょうど終わるくらいかな」

もっぱらお昼はパンの陽菜子さんは本日のサ

ンドイツチをほとんど平たいらげて、パックの牛乳を
ひとくち口にしてからから話はじめた。

「私もビジネス書とか沢山読んでいくうちに知

ったんだけどさ、世の中には『従業員』、『自営業』、

『ビジネスオーナー』、『投資家』の四種類の生き

方があって、それぞれの生き方で、成功するため

のルールも、考え方も、必要な能力もまったく違

うという話なんだわ、これが。だから、それぞれ

のクワドラントはあたかも壁か何かに隔てられ

てるかのようっていうかさ」

そこで陽菜子さんが一呼吸入れる。

「一つ目の生き方、『従業員』は、一番一般的な

会社員なり公務員なりになって、お給料を貰って

収入を得ていく生き方のこと。毎月安定的にお金

は貰えるんだけど、ある程度上限があって、一定

以上の収入は期待できない。最大で年数千万って

とこかなあ。普通はそれよりずっと少ないけどね。

あと、自由時間が非常に少ない。一日八時間とか、

十時間とかざらにお仕事に時間を使ってしま
うのがこの生き方」

「二つ目の生き方、『自営業』は、まあ、自分で
小さいお店や会社をやってる人達だね。商店街
の八百屋さんやおやから町角まちかどの小さいラーメン屋さん
まで、色々ね。『従業員』に比べて収入が不安定
になる反面、働いた分だけ収入を手にすることが
できるのがこの生き方の特徴。頑張れば一億円稼
げるかもしれないけれど、頑張らなければ収入ゼ
ロにもなり得ちゃう。そんな生き方。自由時間は、
まあ、自分の選択によるんだけど、会社員の人達
が分担ぶんたんしてやってる仕事をほとんど一人でやら
なきゃならなかったりして、仕事に没頭ぼつとうすればす
るほど少なくなっていく感じ。それが、この生き
方。この『従業員』と『自営業』の二つの生き方
をまとめて、『左側のクワドラントの生き方』な
んて言ったりするの。自由時間が少ない点あたり
で括くってるのかな」

「三つ目の生き方、『ビジネスオーナー』は、自
分がいなくても回るビジネスを所有しよゆうしてる人。こ
の辺りの人は全体数が少ないんで、一般人はあん
まり会わないし、具体例もあげづらくなるね。ビ
ジネスが利益を生み出すまでは収入はゼロなん
だけど、一旦ビジネスが軌道きどうに乗れば、自分の時
間を使わなくても収入が得られるようになるの
が特徴。自分で働く必要がなくなるため、自由時
間はかなりある生き方だね」

「最後の四つ目の生き方、『投資家』は、投資に
失敗してお金を失ってしまうリスクがある反面、
投資に成功した時は大きなリターンが得られる
って生き方だね。成功する投資はお金がお金を呼
び込んでくれるんで、自分で働く必要がないから、
この生き方もかなり自由時間がある生き方だね。
例としては、勿論もちろんキコちゃんのお兄さんの紀之先
輩せうなんかそうってわけ。『ビジネスオーナー』
と『投資家』、この二つの生き方を括くって、『右側

のクワドラントの生き方』なんて言うわけ。どっ
ちも自由になる時間が多いんだね」

そこまで一気に語り終えた所で陽菜子さんが
席を立った。そろそろ、食堂にお盆を返しにい
かないと午後の授業に間に合わなくなる時間帯
ある。

「分かった？」

「うーん、まあまあ」

陽菜子さんの問いかけに答えながら、頭の中を
整理してみる。

キコのお父さん。お父さんは会社勤めだから、
陽菜子さんの話したクワドラントの中ではもろ
に「従業員」に当てはまる。安定した生き方。そ
う、安定した収入を家庭に入れるために、お父さ
んは会社をやめることができなかった。そして、
自由になる時間が少なかったのも確かだ。例えば、
お母さんの介護に日中付き合うというような時
間は捻出できなかった。だから代わりに、兄さん

がリスクを引き受けて自由な時間が捻出できる
『投資家』の生き方に転身したんだ。いわば、お
父さんと兄さんで、安定と自由な時間の二つを二
人がかりで何とか埋めたような、それが、キコの
家族が選んだ決断だったわけだ。

結果的にそのまま「従業員」の生き方を続ける
ことになったお父さんに比べて、ううん、勿論お
父さんもすごく悩んだのは知ってるけど、それで
も兄さんは大変だったと思う。『投資家』なんて
生き方。それまで兄さんが目指して技を磨いてき
た生き方と全然違う訳で……。

そこまで考えを整理した所でキコの頭に一つ
の疑問がわいた。

「陽菜子さん、じゃあさ、兄さんが目指してた研
究者っていうのは、その、クワドラントか。それ
のどこに入るわけ？」

『従業員』だね。国からにしろ、企業からにし
ろ、上からお給料を貰う代わりに縛りも受け入れ

て研究するわけだから。そこで最初の壁の話に戻るよ」

陽菜子さんがキコのお盆を手に取りながら言う。

「紀之先輩は、研究者として生きるために『従業員』クワドラントの中で頑張っていたんだけど、そこから『投資家』クワドラントへと壁を超えて移動していったんだよ。左のクワドラントから、右のクワドラントへの移動だね。この移動はビジネスの世界ではとても難しいと言われているの。さっきも言ったとおり、クワドラントが違っていると必要な考え方も、成功するためのルールもまったく違ってくるからね。だから……」

一呼吸おいて陽菜子さんが言う。

「キコちゃんは、クワドラントの壁を越えていった紀之先輩に、置いていかれちゃったような気がして、寂しく感じちゃってるんじゃない？ 壁を越える途中で紀之先輩も色々と考え方を変えて

いったらうし。自分と同じ場所にいたと思ってた人が、違う場所に行っちゃうって、その人を尊敬していればしているほど、切ないことかもしれないから」

キコは、兄さんが在宅でトレーダーをやるようになってから、次第に食卓でお父さんと兄さんがお金の話をする機会が多くなったことを思い起こした。そのことに気付いた時、どちらかというと清貧なイメージがあった兄さんがなんとなく変わってしまったような気がして妙に寂しかった。そんな想いを抱いたことは、確かにある。

「でも、だからこそ、紀之先輩は偉大だよ。やっぱり私、一度じっくり話を聞いてみなくちゃと思ってるわけ。クワドラントの壁を越えてちゃんとやってる先輩で、私の先行者だからね。そんな人が身近にいるなんて私ラッキーだよ」

「でも、陽菜子さんは『投資家』になるわけじゃないんでしょ？」

そこまで色々分かってて、壁を越えていった兄さんに対して寂しい思いを抱いてるなんてキコの気持ちもたぶんの確てきかくに言い当てることが出来て、それでも陽菜子さんまで壁の向こう側に行っちゃうなんて言うんだねと、キコは思わず陽菜子さんを問いつめたい気持ちにかられたが、飲み込んで質問した。

「うん、私が行きたいクラウドラントは『ビジネスオーナー』。どんなビジネスかは、目下もっか立ち上げ中。だけど『ビジネスオーナー』と『投資家』は密接みっせつな関係にあるから紀之先輩に会うのは無駄じゃないはずなんだ。たぶん、紀之先輩もかなりのビジネススキルを身につけてるはずだよ。ほら、投資って、結局はいいビジネスをやってる企業にお金を投資するわけじゃない？ その企業のやっってるビジネスが見込みがあるかないか理解しないといけないから、結局『ビジネスオーナー』としての素養そようも求められるんだよね」

そこまで言っただけで陽菜子さんは浮うかない顔のキコに気づいたようだった。長いつき合いだから、そんな時陽菜子さんがどう言うかキコには分かっていた。

「紀之先輩と、よく話しなよ。そして、私ともいっぱい話そう」

陽菜子さんがそういった所で、予鈴よれいのチャイムが鳴った。

よく話そうって、キコがちよつと悩んでる時、暗い顔をしてる時、陽菜子さんはよくそう言っただけで元気づけてくれるよね。あと、一緒に遊ぼうってよく言っただけで励ましてくれるよね。キコはそんな陽菜子さんが好きだったし、事実、これまで一緒に沢山話してきたし、沢山遊んできた。いつも元気を貰ってきた。けれど、今回のこの心にわだかまる翳かげりは、キコが結構な昔から考えていた想念にまつわること、ちよつとばかしやっかない感じなの。だって、もし壁の向こうに陽菜子さん

も行ってしまったら、そもそも一緒にお話することも、遊ぶことも難しくなってしまうんじゃない？いつものように明朗な言葉をかけてくれる陽菜子さんが陽菜子さんらしくて嬉しい反面、やっぱりどこか自分は取り残されてしまったような気もしてしまって、元気を貰いながらもどこか切ない、複雑な気持ちのままキコは昼休みを終えることになった。



その日の夜、陽菜子さんからメールが届いた。丁度、次が土日で休みという塩梅あんばいの金曜の夜である。

——明日一緒にバイトしてみない？ 昼間の話。クワドラントについては体験してみるのが一番だと思っただよね。

特に予定もなかったし、基本的に陽菜子さんと一緒にいるのは楽しいし、バイトと言うからにはバイト代も貰えるのかななんて、その辺りにも魅力みりょくを感じたしということで、キコは了解りようかいの旨むねのメールを返信した。

この時点では、四つのクワドラントの全てを回る中々に壮大そうだいな旅が始まろうとしているとは思ってなかったんだけど。



「今日は『従業員』の日！」
出鼻でばなにそう陽菜子さんに宣言された次の日の一日は、あまり心地よくはない疲労感ひろうかんと共に暮れようとしていた。

場所は、キコと陽菜子さんが毎朝通っていた、島田さんが店員をやっているゲームセンターだ

った。

島田さん経由で陽菜子さんが順調じゅんちょうにか多少無理矢理にか話をつけて、一日アルバイトをさせて頂く次第になったらしい。

ゲームセンターでバイトというから、てっきりお客さんのお相手でもするのかと思っただけど、実際はなんか事務所みたいな所に通されて、パソコンに向かってひたすら事務という次第で、会計業務かいけいぎょうむの一端みたいなんだけど、とにかく紙で渡された数字や文章をひたすらパソコンに入力するという作業をキコは一日こなすこととなった。

キコが一番単純なその作業をやったのけ、陽菜子さんはキコの入力した文書なり数字なりを編集するという、もうちよつとだけクリエイティブな作業を一日担当した。私達が使えるパソコンは事務所に一台しかないことを陽菜子さんは事前さきに知っていたらしく、陽菜子さんは自分のマイ・

ラップトップパソコンを持ちこんで作業している。これまた陽菜子さんが持ってきた大容量のデータを記録できるUSBデバイスを使ってキコが入力したデータを陽菜子さんのラップトップへと移し、陽菜子さんの作業終了後にまたキコが割り当てられたデスクトップパソコンに返すという手順である。

約束したバイト終了時刻まであとわずかという時間帯になり、かつ作業も一区切りで今日はこの辺りで終わりかな？ という所になって、ようやく少しだけ一日いっしょ一緒の部屋で働いた、というか本日のキコ達二人のバイトの担当になって頂いていた寺崎さんてらさきというこのゲームセンターで正式に勤務きんむしている男性社員の方と雑談する機会にめぐまれた。

「島田からいきなりバイト二人面倒見てくれたって頼まれた時はちよつとビびったけど、よく働いてくれたね。陽菜子ちゃんって言ったっけ。随分ずいぶん

パソコン使いこなしてるみたいだね」

あ、やっぱり陽菜子さん、地味にカタカタとキーボードを走らせてるようで、人から見ると結構凄いな、とキコは改めて尊敬の眼差しを向ける。

「一心不乱に作業させて頂きました」

と、対人関係を円滑にしちゃういつもの笑顔で陽菜子さんは答え、続けてこう尋ねた。

「寺崎さんは島田さんとは親しいんですか？」

まっすぐに切り揃えられた前髪に、縁の太い眼鏡が印象的で、失礼ながらあまり社交的では無さそうな印象を受ける寺崎さんは答えた。

「ああ、島田とは同期みたいなもんな。俺もあいつもバイトからの昇格組で。あいつ深夜組になっちゃったから最近あんま喋ってないけど。まあ、島田はスゲーやつさ。人当たりもいいしな。本当だったら君たちも島田に見てもらいたかったんだろうけど」

と言って苦笑いする。

「島田さんはスゴイですか」

敢えてどちらが担当云々の所には答えずに陽菜子さんが会話を繋ぐ。

「そりやなあ。俺よりも数段仕事できるし、コミニケーション能力あるし、それに外見もいいだろ？ ちよつとスゲーよなあ。まあ、一番俺が尊敬するのは、知ってるかな？ あいつ、夜間に仕事して、日中は定時制の大学に通ってるんだぜ。歯科医だかなんだかになりたいとか言ってたな。そのバイタリティと、夢を追う姿勢っていうの？ そういうの、尊敬しちゃうよな」

そうだったんだ、とキコは島田さんの意外な一面を聞いて感心する。早朝によく会って挨拶がてらのお話くらいはする間柄だったけど、そんな話は初めて聞いた。兄さんが自画自賛じゃなくて、本人がいない場で他人から称賛される人は信用できるって言ってたっけ。島田さん、きっと本当にすごいんだ。

「寺崎さんにはないんですか、夢というか、目標
というか」

陽菜子さんがごく自然に尋ねる。こういうその
人にとって大事な質問をさらっとできちやうあ
たりもキコは陽菜子さんを尊敬している。短い対
話の間でも、深い話が引き出せちやうっていうの
もすごい能力だあって、これもまた兄さんが言っ
てた。

「夢か、あんま無いなあ。一日一日精一杯せいいつぱいってい
うかさ」

寺崎さんがちよつと寂しそうに答える。

すると陽菜子さんが瞳をちよつと好奇心をも
てあましてルンルンとしてる子どものように輝
かせてこんなことを尋ねた。

「じゃあもし、宝くじでも何でもいいんですけど、
ぼーんと三億円が手に入ったらどうしますか？」

突然と言えば突然の質問に、寺崎さんは少しの
間考えをめぐらせる仕草しぐさをみると、やがて「そう

だね」と前置きしてからこう答えた。

「とりあえず今の仕事やめて一年くらいは家で
ゲームして過ごすかな。ゲーム好きだからゲーム
センターでバイトでもしてみるかかって感じて始
めた仕事だから。その後は、そうだな、自分でゲ
ーム作ったりしてみたい。今でもたまに妄想もうそうする
んだよね。自分で自分のやりたいゲームあれこれ
作ってる風景をさ。最近はやパソコンがスゴイから
個人で作ったゲームなんかネットでも市場を形
成して流行はやったりするんだけど。無理かなあ」

そんなボヤキとも独白とも取れない寺崎さん
の言葉に、陽菜子さんは男性諸君にとっても嬉し
いだろう笑顔を向けて言った。

「なんだ、やっぱりあるんじゃないですか、夢」

寺崎さんは照れたようにちよつと視線を泳が
せながら、机の脇わきから何やら金属の箱を取り出し
て陽菜子さんに手渡した。

開けてみると中には無秩序に収納されたお札さつ

が不特定枚数。ふとくていまいすう

「それお金。本日最後のお仕事ってことで教えてくれる？」

「了解です」

さっそくお札を取り出す陽菜子さんだったが、その前に寺崎さんの机の横に置いてあった段ボール箱を瞳を輝かせながら指さして一言。

「それ、つけてみていいですか？」

「いいけど、イベント用のやつだよ？」

陽菜子さんの指さした先にあったのは、ウサギの耳。俗に言うバニーガールが頭につけてるやつだ。

「陽菜子さん、意味分かんないよ」

一応キコは突っ込みを入れてみる。

「いや、バイト中ずっと気になってたんだけどさ。仮にもお仕事させてもらってる間にウサギ耳っていうのも不謹慎かなと思って。いや、うん。もう終わりだって言うし。いいじゃん！」

いそいそと箱からウサギ耳を取り出して装着する陽菜子さん。そうちやく

「どう？」

「う、うん、何て言うか、ウサギだね」

キコが返答に窮きゆうしていると、やおらウサギ耳陽菜子さんはお金を数え始めた。何故か歌付である。

「ピョンピョンピョン♪ 私はウサギ♪ 寂し

くつても死なないけれど♪ お金が無いと死ん

じゃうピョン♪」

なんかイヤな歌だな、などと思いつつキコは壁に掛けてある時計を見やった。バイト終了の時刻である。

こうして一日目の「従業員」のお勉強は、成果があつたのだから無かつたのだからよく分からないまま終幕を迎えたのだった。しゆうまく

◇

「今日は『自営業』の日！」

翌週の土曜日はそんな陽菜子さんの言葉からはじまり、現在キコは郊外こうがいのキノコ工場でジャージ姿でキノコ菌入りの瓶びんがぎっちり積まれた台車をせつせと運ぶ作業に従事じゅうじしている。

この工場まで自転車でやってくるのにそもそも一時間弱かかって消耗気味しょうもつぎみだというのに、工場についてから説明されたバイトの内容というものも、中々重たいキノコ台車を人力移動させながら工場の作業部屋と別室を行ったり来たりという体力勝負な内容で、自他じたども共に認める文系少女のキコとしては既にちよつとバテ気味だったり。

陽菜子さんの方かというと、こちらは機械仕事で、器用にアーム（つていいうのかな？）を操作して、キノコ瓶が1ダース入ったケースをキノコ機械（キンカキ機というらしい）に乗せる作業に従事している。なんか、去年の夏にここでバイトし

てたとかで、陽菜子さんの方は工場専用の作業着なんかを着込んでやってる。キコは「動きやすくて、キノコのおいがついてもいい服装」とだけ言われていたので、昔、体育の授業で着ていたジャージなんかを引っ張り出してきたんだけど、グレーのいかにも作業員って感じの陽菜子さんの格好の方も羨ましかったかもだ。まあ、女の子二人さあ肉体労働します！ って感じの服装で、しかも場所はキノコ工場で、いったいどういう絵になってるんだというのはバイト開始から頭に浮かんでは消えていく疑問ではあるんだけど。

「お嬢ちゃん、次の台車から別な列に並べておくれ。六台で一列って覚えておいて」

今回キコと陽菜子さんを見てくれている、というか本人も同じ場所で仕事しながらこつちの作業もカバーしてくれてる山田やまださんからキコに指示が入った。

「りよ、了解です」

キコは懇懃^{いんぎん}に返事をする、キノコ機械から解き放たれたキノコ瓶詰^{びんづめ}めの台車を引つ張り出し、別室（距離約三十メートル）に向かって移動を始めた。一定の台数をこなしたので、既に学んだことも多い。押して持つていくより、引いて運んだ方が楽だ。

キノコ。今回はシメジなんだけど、シメジってこうやって作ってるのねと、多少感慨^{かんがい}深い感想はキコも持ちながら仕事に従事している。陽菜子さんがアームで乗せたキノコ菌入りの瓶が詰まったケースが、キノコ機械のベルトコンベアーの上を坦々とまずは流れていく。その過程で機械が自動で何やら瓶の表層のクズを掻^かいたり、水を注入したりといった作業を行って、最終的にベルトコンベアーの終着点である、キコが前でスタンバイしている台車の上にどンドンと工程^{こうてい}を終えたキノコケースが積み上がっていく。一番上まで積み上がったらい一区切り、キコは台車を引き出し

て、新しい空の台車をセット、その後、キノコ台車を引つ張って別室まで持っていき並べて寝かせておくと。こういう作業工程だ。この別室っていうのも最初にドアを開けて入った時は天井からいきなり霧^{きり}が吹き出してきて、一体何の攻撃か！ なんて思ったのだけど、陽菜子さんから説明されたことによれば、キノコの発育に適切な湿度に保つためにこうやって霧で湿度調整してるんだとか。「夏にやった時は別室が霧で涼しくてそっちのパートの方が好きだったよ」なんても聞かされたりして。現在のキコ的には、覚えちゃえば陽菜子さんがやってる機械操作のパートの方が体力使わなくて楽そうだなあなんて感じなのだけ。

別室から戻ると、次の台車がキノコケースでいっぱいになるまでの数分間、キコは空き時間になる。その時間を使って機械がトラブルを起こさないか見張っていてくれとは言われているけれど、

当然文系少女でしかも初バイトのキコに細かくトラブルを判断する能力はないし、ましてやトラブルを解決する能力なんて皆無かいむなので、とにかく異常を感じたら山田さんに報告するようにしよう。うとだけ心を決めている。でも、まあ、そんなに気を張らなくても、山田さんはキコのうんと近くで何やら別の作業をしながらこつちも気にかけてくれているので、気分的に楽って言えば楽なんだけど。

「社長さーん。最近、景気どうですかー」

そこで、少し離れた所でアームを動かしていた陽菜子さんから、キコの方に向かって本日作業に入ってから初めての声がかげられた。距離があるのでちよつと大きい声になる。

社長さん？ 誰？ キコが積まれていくキノコ瓶を見つめながら思索していると、となりの山田さんが声を発した。

「ボチボチだべ！ 世の中不景気って言われて

っけども、うちはやれてる方だ！」

え、社長さん？ とキコが地方訛なまりで返事を返した山田さんの方と陽菜子さんの方を見ながらキヨロキヨロとしていると、陽菜子さんの笑い声が入る。

「あははー、キコちゃん！ 山田さんが社長さんだよーん」

エ！ という驚きと共に、陽菜子さんが着てるものと同じグレーの作業服に身を包んだ壮年そうねんの年頃のおじ様を見やると、山田さん改め社長さんはキコの方にも返した。

「んだべ。私が有限会社ウッドチャイルドの社長の山田だべ」

「す、すいません、私気付かなくて……」
てつきり従業員の方だとばかり思ってたキノコはあわてて頭を下げる。キノコの方もチェックしつつ忙しい。

「あはは、スモールビジネス、自営業者の特徴だ

ねえ。社長も現場でフル稼働だよ！」

「んだ。私がないとうちの会社は始まらねえべ」

そこまで聞いた所で目の前の台車がキノコケースでいっぱいになった。別室行きの時間である。

「これで四分の一だべ。お嬢ちゃんガンバだ」

「は、はい。頑張ります」

社長さんからの激励げきれいに答えつつ、新しい台車をセツトし、キコは別室へとキノコ台車を引いていく。

な、なんか、社長さんって言うスーツ姿で立派な椅子に座って、脇には美人秘書さんがいたりして……なんてイメージがあったんだけど、この社長さんはちよつと違うなあなんて、そんな一人カルチャーショックを受けながら、まだ社長さんと話してる陽菜子さんは一体何を喋ってるんだろうと気にしつつ。キコは一人別室行きの扉を開ける紐ひもを引くのであった。

◇

本日のキノコバイトも終盤しゅうばん。

キコが別室に行くサイクルと、陽菜子さんの作業ひまが暇になるサイクルと、そして社長さんのお仕事のサイクルとあるので、全てが上手く一致しないと三人での会話っていうのは無かったんだけど、思い出してみてもキコの心に残った社長さんをお話するのは二つ。

一つ目は、社長さんはなんと年中無休ねんじゅうむきゅうだというお話。小さい会社で回してるとはいえちゃんと社員さんがいて、本日キコと陽菜子さんが行ったような作業にちやを日夜行っではいるんだけど、どうしても毎日社長さん自らでが出向むかないと回らない作業があるらしくて、三百六十五日働いてらっしゃるんだって。

つい、キコは「お正月も休まれないんですか？」

と聞いてしまったんだけど、社長さんはさして驚きもせずこう答えられた。

「んだ。正月は社員には皆休みなみ出すから、逆に正月もバイト代目当てで働きたい大学生あたりをバイトに引つ張ってきて、私と作業するべ。さすがに昼飯だけバイト君ばさそつて家内が作ったおせちとお雑煮ぞうにを食べたりするけども」

もう一つは陽菜子さんの問いかけに社長さんが答えられた時のお話。

陽菜子さんがいつもの陽気さでこんなことを聞いたの。

「社長さん！ 最近の社長さんの最高の瞬間ってどんな感じですか！？」

そうしたら社長さんは少し思案した後、こう答えたの。

「仕事終わってから、夕方にたまにスポーツカーで娘と一緒にドライブに行くときかな。海岸線かいがんせんまで行くんだども、こう、風をきって走ってるとい

い気持ちがつつど」

ああ、表おもてに止めてあつた赤いスポーツカー。高級そうだとは思ったけど、息子さんや娘さんのじゃなくて社長さんのなんだ。

「ああ、いいですねー。キノコ御殿ごてんにキノコカーですねエ」

なんて返す陽菜子さんがその時私にウインクした気がしたわ。確かに、工場りんせつと隣接してるご自宅も立派だったし、スポーツカーもリッチだな、とキコは思う。

確かに、フリーターや、普通の会社勤めの人にはこういう家も車も手に入れるのは難しいものなのかもしれない。

——『自営業』の生き方か……

そうか噛みしめて考えながらキコは、その日最後の別室行きの紐を引いて、本日何度と無く浴びた霧のシャワーを浴びるのだった。

そしてこの霧を浴びること三百六十五日か……

…。

一定時間で自動で閉まる扉を背に、扉の向こうで本日の締め雑談をしている陽菜子さんに想いを馳せながら、キコはちよつとだけクワドラントの違いについて考えをめぐらせたのであった。

◇

「今日は『ビジネスオーナー』の日！」

三週目ともなるとそろそろキコも慣れてきたもので、むしろ陽菜子さんは今度は何処どこに連れて行ってくれるんだろう？ くらいの勢いだったのだけど、意外にも翌週の土曜日に陽菜子さんに誘導ゆうどうされて辿り着いた場所は、キコもよく知ってる近所の公園だった。

「いるかなあ。携帯に電話したら今日は公園にいらと思うから、タイミングが合ったら少しだけお茶してくれるって言ってたんだけど」

小さい頃お父さんに連れて来て貰って一緒に遊んで貰った記憶を少しばかりキコが思い出していると、やがて陽菜子さんが瞳めを輝かせて手を振り始めた。

「いた！ ブランコの所だ！ おーい！ シホちゃん！」

シホちゃん？ 誰それ？ とキコは首をかしげたが、陽菜子さんの声が届いたと見えるや否や、丁度ブランコに乗ってた小さい女の子が勢いよくブランコから飛び降りて、こっちに向かって元気に駆け寄ってくるではないですか。

「ヒナちゃん！ 遊ぼうー！ 白熊白熊！」

ちよつと訳の分からないことを叫びながら小さい体をめいっぱい使って全力ダッシュでこっちに向かつて走ってきたその子は、最後の距離を全身全霊のジャンプで縮めて陽菜子さんの胸にダイブした。

なんだか全身泥んこになってる子だったので、

一瞬、陽菜子さんの服が汚れる！　と思ったキコ
だったけれども、陽菜子さんもこうなることを
見越みこしていたのか、今日はジーンズにTシャツと
いう、さしあたってオシャレ感が薄い、というよ
りもこの子と一緒に遊んでやるくらい
の概きがいを感じる服装をしている。キノコバイトの時
も思ったけれど、少し、その日の適切な服装に関
する情報を前もってもちよつとキコにも教え
て貰えないものなのかなんて感想が頭を過ぎる。

「こちら、シホちゃん」

丁寧に、大人の知人を紹介するように距離感に
気をつけながら陽菜子さんがキコに紹介する。

「ヨシエシホちゃんです！　三歳です！　好き
な動物は白熊です！　好きな食べ物はお肉で
す！」

紹介されたシホちゃんはまっすぐにキコを目
を見て元気よく自己紹介する。

「で、こちら、キコちゃん」

今度はキコが紹介される。これは、自分もしつ
かり自己紹介した方がいいのかなと思ひ、キコは
ちよつとドギマギしながら頭を巡らせる。でも、
三歳児にする自己紹介って？

「えーと、キコちゃんです。十七歳です。好きな
動物は……えーと、キリンです。好きな食べ物は、
お肉よりお魚の方が好きかな？」

「シホもキリンさん好き！」

輝いた瞳めでルンと見つめられると、必要以上に
ホワホワとしてしまつて。なんというか、泥んこ
だから最初は気づかなかつたけれど、大きい凛りんと
した瞳ひとみに明朗な印象を与えるショートカットの、
ものすごく可愛い娘こだ。

「シホちゃん、オカピも好き！」

「あ、うん、四大珍獣よんだいちんじゅうのね」

何故か三歳の女の子とコアな動物トークに突
入しそうになった所で、陽菜子さんがシホちゃん
に尋ねた。

「シホちゃん。パパは？ お姉ちゃん達、今日はシホちゃんのパパとお話したくて来たんだけど」

「あっちー」

シホちゃんの指した方向を見やると、なるほど、ブランコからちよつと離れたベンチに座っていた人影がこちらに向かって手を振っている。

「キコちゃん。あの人がお目当ての『ビジネスオーナー』の吉江さんだよ。私はシホちゃんと遊んでるから、ばっちりお話し^{はなし}してきてね」

エ、陽菜子さん一緒じゃないの？ とキコが狼狽^{ろうばい}してる間に、さつさと陽菜子さんはシホちゃんを連れてジャングルジムの方に向かって行ってしまった。

「私はしょっちゅうお話聞いているもん！ 十分だけお話してごらん。きつと『ビジネスオーナー』についてちよつとだけ分かるよ！」
だって。

◇

「陽菜子さんと知り合いになったのはシロクマがきつかけだったんですよ。娘が好きでしてね。ちようどここの公園で娘と陽菜子さんが意気^{いきとうごう}投合して初めて遊んだ時に娘がシロクマキャップを被^{かぶ}ってたんですが。その時、『好きなんだったらあげる！』と仰ってシロクマのぬいぐるみの小さいヤツを娘にくれまして。それもまたレアものでして。シホ喜んでましたねー。いいですね。ああいう。自分の好きなモノを分かち合おうという姿勢は」

「そ、そうですね。陽菜子さんらしいです」

キコとしては、どういう経緯^{けいゐ}か初対面の男の人と二人でベンチに腰掛けてお話することになつてしまったな、というとまどいが拭^{ぬぐ}いきれないままだったのだけど、既にお互い自己紹介を終えて、陽菜子さん曰く「ビジネスオーナー」のこの吉江

さんという男の方と、キコは二人で遠くで遊んでる陽菜子さんとシホちゃんを並んで眺めながら語らいモードに突入してしまっていた。

初対面だからという理由だけではなく、吉江さんというこの方の身なりの第一印象も未だにキコに違和感を与え続けている一要因である。

なんというか、ジーパンによれよれのTシャツ

……まではまあいいとして、肩まで伸びてる長髪

に長めのあご髭とまでできた日には、ちよつと、ど

この落ち武者さんですか？ と思わず尋ねたく

なってしまうような外見である。この人が「ビジ

ネスオーナー」？ もつと、パリつとしたスーツ

に身を包んでるジェントルマンを想像していた

のだけれど、これはちよつとイメージとギャップ

がありすぎる。陽菜子さんも「ビジネスオーナー」

を指摘してると言ってたけれど、ふだんオシャレ

で綺麗にしている陽菜子さんとこの方はちよつ

と外見に差異がありすぎる。

「ああ、この格好ですか。娘と毎日遊んでるうちに遊びやすい格好優先になってきてしまってますね。ちよつと、年頃の娘さんからするとキモイですかね。娘も年頃になってきたら嫌われちゃいますかね」

「い、いえ、状況、環境に合わせた格好が一番じゃないかと。白熊も寒いところにいるからフカフカなわけですし」

しまった、顔に出ていたらしいとあわてふためいてしまった、思わずキコは混乱した返答を返す。

「陽菜子さんもそうですが、あなたも結構ユニークなもの言い方をしますね」

穏やかな笑い顔を向ける吉江さんだったが、正面から見つめられてちよつとドギマギする。ああ、そうだ、この男の人、なんだか子供みたいにルンルンとした瞳をしてる所だけ陽菜子さんに似ている。

「吉江さんは『ビジネスオーナー』だと陽菜子さ

んから聞きました」

本題に入る。

「そうですね、いわゆるビジネス用語のクラウドラントの中ではもろに『ビジネスオーナー』の場所に私はいると思います」

「でも、その、ちょっと私のイメージと違ったっていうか。それにさっきはずっと娘さんと遊んでいらっしやるって」

陽菜子さんと楽しそうに遊んでるシホちゃんを見やる。いいなあ。楽しそう。

「はは、毎日遊んで、格好もヒッピーみたいで、この人大丈夫か？ と、そんな感じですかねえ」

「い、いえ、そんなことは」

「まあ、実はヒッピーもホームレスも経験したことがあるんでそう思って頂いてもあながち間違いじゃないんですが、たぶん陽菜子さんが今日キコさんを私のもとに連れてきたのはヒッピーとしての私の話を聞かせるためではないでしょう。」

おそらく、私のような収入と自由な時間の両方を持って生きている人もいるということを知って欲しかったんだと思います」

「やっぱり、そうなんだとキコは思う。陽菜子さんからクラウドラントのお話を聞いたばかりの時はなんか具体的にイメージできなかつたんだけど、ここに、キコの知らなかつた生き方してる人が現実にいるんだと実感する。陽菜子さんの人脈はスゴイ。きっかけを作ったシロックマもスゴイ。」

「単純に仕組みだけお話ししますと、私が収入と自由な時間を両立しながら生きていられるのは、私がいなくても回るビジネスを所有しているからです。具体的に見せた方が分かりやすいですかね。私の場合のビジネスはこれです」

「そうやってベンチの横に置いてあつたラップトップパソコンを開いて立ち上げる。立ち上がり早い。これはかなりの高スペックパソコンだ。」

「これです」

またたく間にWEBサイトが表示される。モバイルのネット環境も当然の如くついているらしい。

現れたのは、キコの主観でも涼しげな印象を受けるブルーを基調きちょうとしたプロが作ったと思われるWEBサイト。

「これは、何か、マッサージしたりお風呂に入ったりする施設しせつのWEBサイトですか？」

トップページにマッサージしてもらってる人の写真とお風呂に入ってる人の写真がカッコいいレイアウトで表示されていたので、そのままの感想を述べる。

「そうですね、プールなんかありますが、スポーツクラブならぬリラクスクラブとでも言いましょうか。その高級なヤツのWEBサイトです」

「つまり、吉江さんは、この高級リラクスクラ

ブ？ のオーナーさんでいらっしやるということですか？」

「そういうことです。施設の運営自体は優秀な社長さんを雇ってほぼ完璧にやっております。

現在は私は、会員権かいいんけんの販売だけを担当しています。とは言っても既にこのWEBサイトに色んな工夫くわが施ほどこしてあって、特に何もしなくてもこのサイト経由でこの会員になりたいという、まあ、比較的小金持ちのお客さん達が自然に集まってくるようにはなってますけどね。なので、私はたまたま、メールマガジンなどでお客さんが喜んでくれるお話を届けているだけです。そんなに時間は食いませんので、まあ、娘と遊んでいられるわけです」

始終しじゆう笑顔をやさずに吉江さんは説明してくれた。これで十分だ。細かい仕組みを今キコが聞いてもしょうがない。本当に、自動で収入が入るビジネスを所有しながら自由な時間を生きてる

人がいるということが分かった。幻の絵空事えそらごとではない。そのことが重要なのだ。

「どうして、『ビジネスオーナー』の生き方をしようと思ったんですか？」

陽菜子さんの行きたい場所。それはキコにとっては本当に率直そつちよくな質問だった。

「やっぱり、陽菜子さんと同じくあなたもユニークですね。この話をする、普通は、そんな生き方ずるい！ と怒ったり、自分にもお金の稼ぎ方を教えてくれ！ とハイテンションになったりする人が多いんですけどね」

そう言いながら、吉江さんは今では陽菜子さんと滑り台すべで遊んでるシホちゃんをととても優しい瞳めで見つめた。

「娘とね、遊ぶ時間が欲しかったんです。昔から子供と遊ぶのが好きでした。自分に子供が生まれましたら、ある程度大きくなるまでは目一杯めいっぱい遊んでやりたい。ずっとそう思っていたんです。そのた

めには自由な時間が必要だった。その生き方を実現できるクワドランプがたまたま『ビジネスオーナー』だった。だから頑張った。本当、それだけなんです」

「そうですか」

キコは陽菜子さんのまわりを忙しくクルクルと回ってるシホちゃんを眺めながら、自然と、何が腑ふに落ちた気がした。

「私も、小さい頃、お父さんに連れられてよくこの公園で遊んでたんですけど、はい、何て言うか、楽しかったな」

自然と口に出た言葉だったが、それを聞いた吉江さんは大いに破顔はがんして答えた。

「それを聞いて勇気づけられました。たまに不安になることがあるんですよ。私の選択が果たして娘にとって本当に価値あることなのかってね。バリバリと経営を拡大して、娘と遊ぶ時間なんか顧かえりみず仕事に励んで、沢山のお金を残してやつ

た方が本当は娘のためになるんじゃないかなんて思ってしまうこともあって。だけど、やっぱりね、自分の本心は誤魔化せないんです。私がこの公園で娘と過ごす時間は、私にとってかけがえないものなのです。それが娘にとっても楽しい思い出の一部となるのなら、どんな大金を手にするよりもこれ以上報われることはありません」

そう言っただけで吉江さんは立ち上がり、やがてシホちゃんと陽菜子さんの方に手を振りながら歩き始めた。吉江さんは何も言葉には出さなかったが、今日はこの辺りしておきますかという含意が感じられたので、キコは「ありがとうございます」とお辞儀だけして、愛する娘を迎えに行く吉江さんの背中を見やった。これが壁の向こう側にいる人の背中かという思念がちよつとだけ過ぎたけれど、キコがその時かすかに思い出したのは、時々心に過ぎって寝苦しくなる重圧的な境界を分かつ壁のイメージではなく、そんなものとは無

縁な幼い頃に追いかけたお父さんの背中だった。お話が聞けて良かった。素直にそう思っただけで『ビジネスオーナー』の一日は幕を閉じた。

◇

「それで今日は『投資家』の日！ ってわけか」そう言っただけで笑った兄さんと陽菜子さんのご対面で、翌週の最後の「投資家」の日は始まり、既に小一時間が経過していた。陽菜子さんと兄さんがキコが聞き慣れないビジネスの専門用語を駆使してお話している。「オークション」、「ブログ」、「アフィリエイト」くらいまでならキコも大体は理解できるけど、「SEO」、「PPC広告」というレベルになつてくるともうお手上げだ。陽菜子さんがやるうとしてるのはどうやらインターネットを使ったビジネスらしいということだけがかるうじて理解できる。兄さんは分かるけ

ど、陽菜子さんも本当に勉強してたんだなあ。

これまでの三週間はキコの方がお客様という感じだったけれど、本日は陽菜子さんの方がメインで兄さんに会いに来たので、熱心に兄さんの方を向いてお話をしている。丁度、先週キコに吉江さんを陽菜子さんが紹介してくれたように、今週はキコが兄さんを陽菜子さんに引き合わせた形なのだ。

のんびり出勤のお父さんが会社に向かう頃に朝は起きてきて、日中は主に家事と介護、夜にちよつと遅くまで起きて仕事をしているという生活スタイルの兄さんなので、本日は夜の会合となった。普段のお仕事時間にわざわざ時間を取って貰っているわけだけど、その所はあつさりとか快諾かいだくしてくれた。なんでも兄さんの投資スタイルは「一日やそこら休んでも大局的に影響は出ない投資スタイル」なのだそうである。兄さんはダークトーンのほどよく色あせたミリタリーパンツ

にブラウンの長袖シャツというスタイルだが、特に陽菜子さんが来てるためにほどよくオシャレを決め込んでいるというわけではない。根がきちんとした人なので、夜の仕事でも寝る直前までちゃんとした服装をしているのが常なのだ。在宅の仕事なんて極端きよくたんに言えばパジャマのままでもできちやうんだけど、その辺りはきちんとした兄で妹のキコとしては嬉しい。まあ、自慢の兄さんです。

今はナチュラルになってるけど、大学生時代にちよつと長めにして軽く髪を染めてた頃はそりゃカッコ良かったりもしたんです。それこそ陽菜子さんとお似合いなくらいに。

「あとは、心構えみたいなものあります？」

陽菜子さんが兄さんに尋ねる。陽菜子さんが最も聞きたかったと思われる、陽菜子さんがやろうとしているビジネスについての具体的なアドバイスの部分は、段々キコの手にも負える範疇はんちゆうを超

える話になってきたので半ば話に付いていくのを断念していたキコだったのだけど、「心構え」という漠然とした精神論に話が戻ってきたことで再度会話に参加できそうだと、キコは兄さんの回答を意識を向けて待った。

「楽しんでやることかな」

兄さんは陽菜子さんとお見合いでもしてるかのように正面から陽菜子さんを見やって、ちよつと笑いかけながら言った。

「あ、それは分かるかも」

と、陽菜子さん。

「俺も最初はさ、急激に環境が変わって大変だったじゃない？ 必死になって、余裕なくしちやつて、それこそ稼がなきゃ、成功しなきゃ……って回り見えなくなっちゃったりして、正直キツイ時期もあったんだよ。でもさ、ある時それって損だなんて思ってた。段々、投資を通してビジネスのこととか、社会を動かしてるお金のこととかが分か

ってくるうちに、ああ、俺、今、世の中のこと学んでるって、そしてそんな世の中の一員として俺生きてるって、そんな実感が沸いてきてさ。それって、研究者目指してた頃感じてた世界を探索していく喜びと何か似てたんだよね。そうしたら、なんだか楽しくなってきた、自然と肩の力が抜けてきたんだ。それからだよ、色々と効率も上がって、投資も上手くいきだしたのは」

心持ち、陽菜子さんの瞳が輝いたように見えた。

「楽しいこと、好きなことをやってる時のパワーって無限大って感じる時、ありますよね。私も、どうせだったらうんと楽しんで、パワー全開で進みたいと思ってるんです」

「それがいいよ。ちよつと大げさな言い方かもしれないけれど、クワドラントを越境する醍醐味は、結果じゃなくてその過程にあるような気がする。

『ビジネスオーナー』になれたから豊かで幸せっ

ていうよりも、そうなるうとして色々頑張ってる
その一瞬一瞬が楽しいんじゃないかな。少なくとも
俺はそう思うよ」

通じ合ってる兄さんと陽菜子さんを前に、キコ
もついついその二人の話に共感したくなってしま
まう。確かにそれって楽しそう。キコも昔から感
じることがある、何か境界を越えていく人を見る
時に感じるワクワク。この二人を見てると、そんな
気分の高揚を感じてしまう。

でも、そのワクワクに素直に全身でダイブしち
やって浸れないのが、常々自分を悩ませていた命
題なんだと、キコは自分で分かっている。ワクワ
クを感じる度にどこかでひっかかる微妙な気持ち
ちがずつとあつて。その気持ちの中々ぬぐえない
から寝付きが悪い。そういうえば兄さんからこんな
話を聞いたのも初めてだ。自分の気持ちを整理す
る良い機会かもしれない。そう思って、キコは断
片的な自分のわだかまりを少しだけ口にしてみ

ることにした。

「でも、兄さん、境界を越えていくことは楽しい
ことばかりなの？ 例えば、もといた場所に残し
てきてしまった人のこととか、境界を越える前の
自分のこととか、切なくはならないの？」

兄さんは、キコの口からそんな問いかけが発せ
られたことに少しだけ驚いたようだったけれど、
少しの間を置いた後、何気なく、しかし確信めい
た口ぶりでこう答えた。

「前いた場所の想いも、自分も、生きてるよ」

キコだけじゃなく、陽菜子さんも兄さんの方に
居直って続く言葉を待つ。

「ちよつと説明しづらいけど、俺、こういう生活
始めてからもさ、前いた場所の、俺の場合は大学
の研究室だけど、仲間と結構頻繁に連絡取り合っ
てるんだ。あいつらは今では研究者の第一歩を踏
み出していたり、もう数年の間教員やっていたり
奴らが多くて、皆、クワドラントで言えば『従業

員』の奴らで、今の俺とは違う生き方をしてるんだけど、結構インスピレーション貰うことが多いよ。やっぱり、そこは俺がもといた場所だからだと思う。例えば今は冗談交じりに俺が教育ファンドを結成して、仲間内で学校の一つでも経営しようかなんて話をしたりもしてるんだけど、そういう何気ない冗談が俺を生かしている。生きる道が違っちゃって切ないって言えば切ないけれど、そんな何気ない元いた場所から貰えるパワーは、確実に俺に活力を与えてくれる。それは、切なくても強い力なんだ。それは自分についても同じことで、例えば俺は研究者目指してた頃はパソコンの表計算ソフト使うことが多くて、かなりの技術をマスターしたんだけど、この技術が、結構投資の時に生きてきたりするんだよね。そんな時思うよ。前いた場所の自分が、今いる場所の自分も助けてくれてるって。繋がってるって。だから、そんなに寂しくなんかない。もつとも、こう思えるよう

になったのは結構最近のことだけだね」

兄さんの話を聞き終わったところで、フと陽菜子さんと瞳が合う。いつもの満面の笑みよりも、少し抑えめの微笑で笑いかけてくる陽菜子さん。これはどういう意味なんだろう。

勿論、今の兄さんの話で陽菜子さんが越境しようとしていることに関する切ない気分が全て無くなったわけではないけれど、キコは少しだけ何かが分かりかけてきたような気もしてきた。

特に「想いが生きている」という兄さんの言葉に、ひどく勇気づけられるような気がした。キコは古典が好きなのだけど、それはそこに昔の人達の「想いが生きている」ような気がしているからだ。残留している「想い」に触れたとき、何故だかいいようなない熱い気持ちがあふれてくる。そんな経験がキコにはある。

ほんの少しだけ、何かを掴んだかもしれない。そんな気がして、キコは、今晚は陽菜子さんの越

境にどう接するかよく考えてみようと思った。

「従業員」と、「自営業」と、「ビジネスオーナー」と、「投資家」と、色んな人の話を聞いてきたから、それらを踏まえて少し、考える時間が欲しい。

キコの大好きな古典と、陽菜子さんからももらったシロクマが散乱さんらんしている自分の部屋で、少しゆつくりと、考えてみよう。

そうして夜は暮れていき、四つのクワドラントを回ったキコの旅はひとまずの区切りを迎えたのであった。



クワドラントの旅の最終週に兄さんと会合した翌日から、陽菜子さんは学校を休むようになった。それに伴ってキコとの朝遊びもしばらく休止にさせて欲しいとの旨のメールをキコは受け取っている。陽菜子さんは前々から気分がのらない

時は自主休校しちゃうことがある人だったけど、これだけ長期になるのは初めてのことだ。「色々やることが分かってきたから、ちよつとそっちに集中したい」というのが、休み始めの陽菜子さんの言げんだ。

やっぱり、ほんのちよつと寂しくて、最初のうちは陽菜子さんが遠くに行っちゃう感覚がぬぐえなくてどうにもやるせない気分になったりしたんだけど、毎日届く、というか日に三、四通も届くメールにこっちからも返信してやりとりしてるうちに、少しずつ気分も変わってきた。

メールの返信に励ましの言葉しか書けない自分にキコが気づいたのは、陽菜子さんが学校を休みはじめてから一週間が経過した頃だ。その間、キコは事細かにその日の活動と成果を報告してくる陽菜子さんのメールにひたすら励ましの言葉を返し、いつしか自分も一緒になって頑張っているかのような感覚を感じるようになっていた。

やれ、今日はブログの記事を何件更新した。今

ようつて。

日は大物を仕入れられた。今日はオークションに
出品して何件売れた。そんな報告を受ける度に、

◇

ああ、陽菜子さん頑張ってるんだなあって。だから
かなのかな、その夜、陽菜子さんとのメールのやり
取りを終えたキコはそつと仕事途中の兄さん
の部屋をノックし、一言だけ聞いてみた。

「兄さん、『楽しんでやること』って陽菜子さん

にアドバイスしたけれど、それって私にも当ては
まるのかな？」

——旅の和歌について（仮）

それを聞いた兄さんは少しだけ真面目な顔で、
でも陽菜子さんに言ったときよりは身内に語る
時の独特の気安さで、こう答えてくれた。

「あたり前じゃん。キコは、楽しんで生きていい

よ」

経験はなかった。

その後、部屋に戻ってから思ったんだ。明日の
朝は、陽菜子さんに会えない時間を受験勉強で埋
めるんじゃないかって、ちよつと違った活動をしてみ

陽菜子さんが自分の未来に向かって頑張って
る時に、キコだけ漫然まんぜんとした時間を過ごすのは我
慢がならないと思った。無性に、何かを頑張りたい

い、そんな気持ちに胸に溢れていた。現実的に将来について考えるならば、受験勉強をするのが一番堅実で生産的なんだろうけれど、今のキコにはなんだか「堅実」とか「生産的」という言葉よりも優先したい感情がわき起こっていて、この、いつも陽菜子さんと過ごした朝の時間だけは、世の大多数の受験生と同じことをするのではなく、陽菜子さんと何かを共有する時間にあてたい、そんなことを思うようになっていた。

だから、「楽しいこと」をやっている陽菜子さんと同じに、自分もこの時間は自分の将来に関係しつつも「楽しいこと」をやって過ごしたいと、そう思った。「楽しいこと」で頑張る者同士。そんな関係になれたら、それは、きつとどこかで繋がってる二人でいられるように思えたから。

それで思いついたのが、古典について自分なりに何かをまとめてみるという作業をやってみようということだ。大げさに言えば、一つ論文を書

いてみよう。そう思いついたのだ。

タイトルはとりあえず適当に。まだまだ漠然としているような気がするけれど、昔から何故か心の片隅に強く残留し続けていた「越境」の概念に関係があるものということで「旅の和歌」を選んだ。

旅の和歌には、国境を超えていく旅人の心情を詠ったものが沢山ある。そういったものを調べて、何か共通点とかを割出してみたら面白いんじゃないだろうかと思っただ。そんなことを考え始めて数瞬、キコは本当に自分が楽しい気分になってきていることに気が付いた。これが、陽菜子さんが言っていた「好きなことをやってパワー全開」という状態なのだろうか。とりあえず、旅の和歌をどんどん抽出して、解釈とか、その背景とかを調べてノートにメモしていこうと思う。最終的にはパソコンで書くことになるんだろうけど、考えをまとめるためのメモくらいは紙に書いていい。古典をやるのに、何でもデジタルにやつ

てしまうというのも野暮だ。やっぱり古典的な手法も使ってみたいじゃないですか。

そんな、気分が高揚こうようしてきて、まず手始めに一番手近な高校の国語びんらん便覧から当たっていろいろと本棚に手をかけた時、携帯から振動音がこぼれた。

陽菜子さんからのメールだ。最近ふきそくぎみは不規則気味の生活でファーストビジネスの作業ぼつとうに没頭しているみたいな陽菜子さんに、今日は堂々とした気分で返信しよう。自分も未来に向けて、楽しいことを始めたんだって、そう伝えよう。キコはそう思ってたワクワクを押さえきれないまま携帯をスライドさせた。



陽菜子さんから毎日届く経過報告のメールと、兄さんにあの日陽菜子さんと話した内容を問い合わせた話とを総合すると、陽菜子さんがやろう

としていることは、簡単に言っちゃえば、「シロクマに関する情報をインターネット経由で販売する」ことみたいだった。笑うなかれ。たかが白熊、されど白熊。兄さんに聞いてみても、これが十分ビジネスとして可能だし、面白い試みなのだそうである。

陽菜子さんは前からインターネットでブログ（ネット上に公開している日記のようなもの）をやっていたんだけど、あの通り、面白い人だから書く文章もそりゃとつても面白くて、結構な人気ブログになったの。そこを見てくれていたえつらんしや閲覧者の皆様に、どうやら今回はお客さんになって頂くといい運びのようだ。

ブログの内容は当然の如く最近陽菜子さんがハマってたシロクマの話題がここしばらく多くなっていたんだけど、それに加えて兄さんのアドバイスで、陽菜子さんはシロクマ専門情報サイトを今回立ち上げたの。当然今まで書いてたブ

ログからリンクを張ってそっちにお客さんを流すわけだから、これが最初からスタートダッシュなサイトになったというわけ。もともと陽菜子さんのブログを読んでシロクマに興味を持っていた人が多いし、陽菜子さんのブログは「シロクマ」関連のキーワードで検索エンジンで検索すると上位に表示されるくらいにブログだったから、効果はてきめんだったというわけ（本当は、この時点でSEOがどうのと、兄さんと陽菜子さんだけが分かっている水面下での努力が既にしていたみたいなのだけだ）。

そして次に、陽菜子さんは前々からやっていた陽菜子さん的には熟練じゆくれんしているネットオークションでのシロクマグッズの入手、販売に力を入れ始めたの。レアもののシロクマグッズを中心にまずは売りに出して、基礎資金きそしきんを稼ぐ。そしてお金を稼ぎつつも、取引時とりひきじのやりとりなんかを通してお客様に陽菜子さんのシロクマサイトを

紹介したりして、さらにサイトへの集客を加速させる。それと同時に、ブログやサイトでの記事に、オークションとシロクマを絡めた内容のものをどんどんアップしていく。そうすることでどんどん陽菜子さんのシロクマサイトにシロクマとオークションに興味を持つ人が集まってくるというわけ。

さらにダメ押しに陽菜子さんはシロクマとオークションをトピックにしたメールマガジンを発行したわ。読みたい人がいつでも登録できて、登録した人には陽菜子さんからのメールが届く。陽菜子さん側からすれば、陽菜子さんのやっているシロクマとオークションに興味がある沢山の人が、いつでもメールが送れるという仕組みなわけ。これもブログ、シロクマサイト、オークションでのやり取りの最中なんかを使ってどんどん宣伝して登録者を増やして、今のところ順調に、いや、かなりのペースで規模を拡大してるみ

たい。

◇

陽菜子さんが自分のビジネスの活動を頑張っている間、キコの方もやると決めた論文作りの活動を頑張った。

まずはピンときた旅の和歌の抽出から始めて、その背景を調べる。兄さんからのアドバイスもあって、作業はそうやって調べた和歌の背景にある心情の共通点に絞った。あ、この歌とこの歌、読まれた時のバックボーンが同じだな……とか、そういう風に気付いたのを中心にどんどんと共通点をリストアップして考えをまとめていく。この作業が、自然と当時の歴史や文化の背景も勉強することになったりして、なんだか昔の人の想いに触れてるような気がして、キコにはささやかな幸福感が感じられる作業だった。

もちろん、陽菜子さんとのメールのやり取りでの励まし合いも楽しかった。充実した時間だった。

陽菜子さんがその日のオークションの売り上げを報告して、お客さんからこんな励ましのメールを貰ったというメールを送ってくれば、キコは今日はこんな和歌について調べて、こんなステキな心情に触れることができたということに熱く返信した。

遠く離れていても、それは充実した時間だった。どんなに遠く離れていても、陽菜子さんを近くに感じている気がしていたし、そして、それぞれがそれぞれに頑張ってきた時、必ずまた会えるという確信が、何故だかキコの胸には溢れていたから。そんな時間を過ごして、三週間が過ぎた。

◇

明日、キコは久々に早朝に陽菜子さんと会う約

束をした。陽菜子さんに直じかに会うのは兄さんと陽菜子さんとで会合した夜以来のことになる。

そろそろ陽菜子さんの出席日数がやばくなってきたという折りに、陽菜子さんの方の仕事がなんとかかんとか一区切りついたという連絡が陽菜子さんから入り、陽菜子さんの方から誘ってきた。キコの方もまがりなりにも三十ページあまりのささやかな論文を書き上げた所だったので、迷うことなく了りよう承しょうの返事を返した。

枕元に携帯とシロツクマをおいて、何とは無しにここ数週付き合った旅の和歌のいくつかを詠えいじて眠りにつく。明日は陽菜子さんと会える。いつか陽菜子さんも言っていたように、明日は陽菜子さんといっぱい話そう。

◇

いつもの大橋の手前の休憩スペースで携帯を

くるくると所在なく回しながら待っていると、橋の向こう側から、しばらく会ってなかったけど心象しんしょう的には見慣れた女の子が手を振りながらゆつくりと歩いてくる。

早朝というよりもまだ夜明け前とでも言えるほどの時間だ。押さえがたいワクワクのせいとか、いつもの時間よりも相当早くにキコはマンションを出て待ち合わせ場所に着いていたのだけど、どうやら陽菜子さんの方も同じだったらしい。

太陽がまだ顔を見せない薄暗い町かたすみの片隅。町の地名的には、橋のこちら側が一丁目、向こう側が二丁目、それだけの意味合いの橋を、何とはなしに今日はキコの方からも橋なかほどの中程に向かつて歩いていく。

橋の真ん中でちょうどご対面してご挨拶。

「やつ、キコちゃん、久しぶり！」

「いえいえこちらこそ……って別に変わらない

ね！ 陽菜子さん！」

相変わらず白が基調の衣服をまとった陽菜子さんと、黒が基調の衣服をまとったキコとが、橋の欄干に並んでもたれかかって、二人でそつとまだ薄暗い遠くの空を見上げる。

「まずは私の方から話そうかな」

そう陽菜子さんが切り出した。

「結果から言うかね。レアものシロツクマの入手法を中心にまとめたイーブック、完成したの」

「おめでとう！」

「あはは、ありがとう！ 名付けて、『シロツクマノウハウー少ない投資でレアものシロツクマを手に入れる例の方法』」なんだけど、これを販売するわ。ブログにサイトにメルマガに、見込み客の集客もまあいい線までいってる。あとは一斉にセールスレターを送って販売を開始するだけ。あとは、紀之先輩のアドバイスを参考に、決済とかその他もろもろ極力自動化して私がそんなに手を加えなくても売れる仕組みも作った」

「すごい！ いよいよ『ビジネスオーナー』デビューだね！」

「あはは、本当に売れるのかどうかとか、まだ全然分らないんだけどね。でもなんとかここまでやってこれたから、とりあえずやってみるって感じかな。キコちゃんの方は？」

キコは一旦正面から陽菜子さんに向き合おうと、手にしていたバックから紐綴じで簡易製本した論文を取り出し、陽菜子さんの前に差し出した。

「CDに焼いて渡した方がイイかなとも思ったんだけど、どうしても紙の質感と一緒に読んで欲しくて……。兄さんには書いてる途中に何度も読んで貰ってチェックしてもらったけど、完成版の最初の読者は陽菜子さんだよ。なんか、うんと楽しんで書いてたら、論文っていうよりエッセイみたいになっちゃったんだけど、良かったら感想聞かせて」

「あはは、私もアナログも好きだよ。がつつり紙

で読むよー。ひゃー、こうやって綴じてあると本当に立派だね。いつか、本当に出版社から製本された本を出してよ！」

そういつて陽菜子さんは受け取って笑った。

「ねえ」

再び空に向き直ってキコは切り出した。

「どうして、起業家になろうと思ったの？ クワ

ドラントの壁を越えるのは、大変なんでしょう」

陽菜子さんは、さして迷う様子もなく、それでいてちよつとだけ照れたような口調で言った。

「楽しそうだったからかな」

空を見上げたまま陽菜子さんは語る。

「本当はね、今でも、不安とワクワクと半分くらい。けど何故だろう。色んな雑音を取り払った所で、心の中に残る大事な直感みたいなものがそう告げているの。こっちに行ったら楽しいって。

それは、何ものにも代え難いものだわ。本当になりたくないもの、行きたい場所がそっちだって分かつ

ちゃったから。だったら、迷わず行ってみちやおうって、本当にそれだけなの。そこに、たまたま壁があった。ただ、それだけ」

「そうか、そうなんだ」

「キコちゃんは？」

そう聞かれて、キコも整理できた胸のうちを陽菜子さんに伝える。

「私も同じ。陽菜子さん、色んな場所を私に見せてくれただけで、一回も一緒に起業家を目指そうとも、私は頑張つて先生を目指してくれとも、言わなかった。当たり前だよ。私がどうしたいか。私が本当に楽しいって思える場所がどこなのか、私にしか分からないものね。だから、この三週間私も直感のままに自分の楽しいことをやってみたわ」

「うん」

「結論は、やっぱり古典の先生になりたい。だって、本当に楽しいんだもの。この楽しさ、沢山の

人に、次の世代に、伝えたいんだもん。ずっと昔から伝わってきた色んな人の想い。そんな想いを伝える人の一人に私もなりたいんだもん。私の行きたい場所はそっち。だけど陽菜子さんと違って、たまたまそっちに壁がなかった。それだけ」

そこまで聞くと、陽菜子さんがポケットから携帯を取り出してスライドさせた。

「そんなキコちゃんだから、好き」

メールの送信画面が立ち上がる。

「だから、一緒に押して欲しいの。一押しで、一齐に私のファーストコンテンツの販促はんそくレターが集めたお客さん全員に送信されるようになってる。このボタンは起爆ボタン。私が超えなきゃならないクワドドラントの壁を崩す、最初の小さな爆弾に繋がってるの」

うつすらと東から太陽が登ってきてキコと陽菜子さんを陽が照らし始める。

「うん、いってらっしゃい」

ふたり、空にかざした携帯に手を添え合あって、エイツと一緒にボタンを押す。

長めの「送信中」の画面。陽菜子さんの「楽しさ」を携たずさえたメールが、空に向かってバラまかれていく。

「どんな人達が、陽菜子さんのメールを読むんだろうね」

「ゲームセンターの店員さん、キノコ工場の社長さん、ITビジネスのオーナーさん、投資家さん、主婦さん、八百屋さん、フリーターさん、誰でもありさ。シロックマ好きには、クワドドラントの境界がないから」

陽菜子さんの方を向き直ると丁度瞳めが合ったので、少し照れ笑いを浮かべてから瞳を閉じてキコはこう詠じた。

するがなるうつの山辺やまべのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

「これは『駿河するがにある宇津うつの山のほとりでは、現
実にも、夢の中でも、恋しいあなたには逢えない
のですね』っていう感じの歌なんだけどね。離愁りしゆう
郷愁きょうしゆうの気持ち。これが今回論文書きながら私が
感じた越境の歌に込められた共通する心情なの。
ねえ、陽菜子さん。陽菜さんはどんな気持ちで
クワドラントの境界を越えていくの？」

そうしたら、陽菜さんはすっかり顔を出した
太陽を背負って光の中で笑いながらこう答えた
の。

「夢でも、現実でも、逢いたいときはいつだって
キコちゃんに逢いに行っちゃうよ。別に私達の間
にベルリンの壁や万里の長城があるわけじゃあ
ないんだもん。ううん、たとえそのくらいおっき
な壁があつたって、私達には無敵の携帯電話があ
るじゃない？ 誰がダメだつて言つたつて、私、
ヤアツつてメール出しちゃうもん！」

そう言った陽菜子さんの表情があまりにも晴
れ晴れとしていたからかな。なんだか、昔から想
いを馳せていた、自分と大事な人との間を分かっ
壁つてヤツは、実はひどく低くてこぢんまりとし
たものだったんじゃないかなんて思えてきて、な
んだかとっても心が軽くなったの。その人が、壁
の向こう側にいるとしても。顔も見えるわ。声も
届くわ。メールもできるわ。だったら、頑張れる。
何故だかそんな気がして、キコは陽菜子さんの両
手を取って大きな声でこう言った。

「陽菜子さん、明日も遊ぼうね！」
つて。

完

あとがき@相羽裕司（あいばゆうじ）

僕が近年好になった作品には「境界」をテーマにしたものが非常に多かったです。ナチュラルとコーディネーターの「境界」でも、人間とオルフェノクの「境界」でも何でもいいんですが、主人公達はそういった「境界」の束縛に悩み、苦しみ、地べたを這いずり回ります。で、最終的にはメンターに導かれたり、自分の原点の想いに回帰するイベントが起こったりして、一段階ステップアップして、そういった「境界」を無化して超えていく、そんなシーンを最高のクライマックスに持ってくる。そんな作劇の作品ですね。

非常に好きなタイプのお話なんですけど、なんか、「境界」に束縛されて苦しんでる部分の物語は読んで非常に重苦しい気分になってしまうことも多々だったんで、もうちょっとこう、簡単に、楽しみながら、飄々と「境界」を超えて行ってしまう人のお話なんかがあってもいいかな、と、そんな思いからこの『陽菜子さんの容易なる越境』は生まれました。色々な「境界」が時に交錯し、時にうやむやになり、時に押しつけられる今の時代。いちいち大仰に構えるのも大変です。もうちょっと容易に「境界」を超えて行けたなら、そこには楽しい人生が待っているかもしれません。

そんな陽菜子さんは作者的にも大好きなキャラです。このお話の後は20代でセミリタイヤ（不労所得が支出を上回ってる状態）して、世界一周の旅にでも出ちゃうんじゃないですかね。でもって、教師になって現実の壁を前に苦悩してるキコのもとにフラッと帰ってきて、キコの憂鬱を爽快に吹っ飛ばして、また旅に出て行っちゃみたいなの。

そんな太陽みたいな娘に想いを馳せつつ、このお話を読んだあなたに少しでも陽の光が届くことを祈って、今年の小説の締めにしたいと思います。

2006.12.24 相羽裕司

こんにちは、霧生実奈 (きりゆうみな) と申します。
『夢守教会』をお手伝いさせて頂いてからから2年 (...も経ったんですね)
その間相羽さんのblogのイラスト (オカピ) を描かせて頂いてたいてい
たんですが、今回もまた幸せな事にイラストを担当させて頂きました。

やっぱり女の子は良いです...可愛い、可愛いよ、ほわほわ。読んで後
学生時代を思い出して甘酸っぱい気持ちになりました。今学生の方はこ
れからの未来に思いを馳せて、今社会人の方は「こんな時もあったな」と
か。最後、陽菜さんが携帯のボタンを押すような気持ちとか。忘れたく
ないような気持ち。

相羽さんの小説はお風呂のようにじんわりと沁みます。かきます。
けどさすがにハンドパワーは出ないようです。シロクマパワー！

PYON
PYON

...すみません、話が脱線しております。なんと申しますか、このような場
を頂き、大変恐縮なのです、ガクブルなのです。おのぼりさん状態です。遭
遇したら優しく道を教えて下さい。すみません、完全に話が脱線しました。
ここまで読んでくださった優しい貴方、きっと来年は良い年になります。あ
りがとうございます。それでは、またどこかで。

<http://www11.plala.or.jp/centurybeat/>

2006.12/24 霧生

【参考元／引用元／ネタ元の文献】

- ロバート・キヨサキ／シャロン・レクター『[金持ち父さんのキャッシュフロー・クワドラント](#)』
をはじめとする『[金持ち父さんシリーズ](#)』
- 本田健さんの『[幸せな小金持ちシリーズ](#)』

【作成者の WEB サイトなど】

▼相羽裕司

- Langage×Langage (<http://www3.plala.or.jp/language/language/>)
- ランゲージダイアリー (<http://aiba.livedoor.biz/>)
- 少女創作ファンブログ (<http://www.shoujosousaku.com/>)
- シロクマさんの介護しながらでも前向きに頑張る (<http://blog.livedoor.jp/language20/>)
- メールマガジン「WEB で収入と創作を加速させる方法」
(<http://www.mag2.com/m/0000231635.html>)

▼霧生実奈

- Centurybeat (<http://www11.plala.or.jp/centurybeat/>)

Copyright(c) 2006 Yuji Aiba. All Rights Reserved.

本 E-Book の全部または一部の複写・複製および転載（WEB への転載含む）を固く禁じます

↓裏表紙イラストあるよ(^^)/

